

特定非営利活動法人 *Cloud JAPAN*

2016年度 活動報告書

特定非営利活動法人 Cloud JAPAN

代表理事 田中 惇敏

mail. info@cloud-japan.org

tel. 0226-29-6514 fax.0226-25-7523



目次

1. みなさまへ	3
2. ソーシャルアントレプレナーが集う場づくり支援事業	3
2.1 2016年度の広がり	3
2.2 仙台ゲストハウス KIKO	4
2.3 クラウドハウスまる	5
2.4 塩ハウス	6
2.5 MAKERS HOUSE in 押上	7
2.6 MAKERS HOUSE in 沼袋	8
2.7 熊本ボランティアハウス山麓園	9
2.8 2017年度の広がり	17
2.8.1 CARAVAN FLAKE in 伊豆大島	17
2.8.2 ちょこっと沼ハウス（仮） in 気仙沼	17
3. ソーシャルアントレプレナーが集う場の運営支援事業	18
4. ソーシャルアントレプレナーの資金調達支援事業	40
4.1 FAAVO 宮城 運営	40
4.2 FAAVO 宮城 プロジェクト成功	40
5. 地域で活動するソーシャルアントレプレナーに係る情報発信事業	41
6. ソーシャルアントレプレナーの育成及び事業促進の教育支援事業	42
6.1 講演活動	42
6.2 家庭教師	42
7. 運営組織	42
8. 取材対応	43
8.1 書籍出版	43
8.2 新聞、メディア	43
9. 終わりに	43



みなさまへ

この度は特定非営利活動法人 Cloud JAPAN の初年度事業報告書をお読みくださり、ありがとうございます。私たち Cloud JAPAN は初めての事業年度を迎えました。怒涛の一年ではありましたが、多くの支援者の皆様に支えていただき、振り返ると全国7軒まで活動を広げることができました。

震災を始めとした社会課題が次から次への沸き起こる世の中ではありますが、個人的には果敢に課題に取り組むことが自分の人生を全うすることであると考えているソーシャルアントレプレナーは増加の一途を辿っていると感じています。私たちは、そういった勇気あるソーシャルアントレプレナーが熱意ではなく安心感や幸福感を持って活動地域と繋がるができることが持続可能な活動、ひいては日本を根本から変えることだと信じています。

私たちが応援するソーシャルアントレプレナーが活動する地域は都会ほど便利ではありませんが人の温かさ溢れる街です。これからも日々の活動を一步步積み上げて活動して参りますのでご指導ご鞭撻賜りますよう宜しくお願い申し上げます。
(代表理事：田中惇敏)

1. ソーシャルアントレプレナーが集う場づくり支援事業

1.1 2016年度の広がり

2016年度は全国の下記7軒の空き家を運用し活動を始めた。

宮城県：仙台ゲストハウス KIKO、気仙沼ゲストハウス“架け橋”、クラウドハウスまる、塩ハウス（計4軒）

東京都：MAKERS HOUSE in 押上、MAKERS HOUSE in 沼袋（計2軒）

熊本県：熊本ボランティアハウス山麓園（計1軒）



Cloud JAPAN

TEL 0226-29-6514
Address 〒988-0224 宮城県気仙沼市長瀬前林55番地3

Page.3

1.2 仙台ゲストハウス KIKO

宮城県仙台市の駅前に立地する KIKO では主に海外の観光客向けに宿だけではなく観光地の案内等を行なった。



来年度は大規模な改修工事を予定しており、今後、東北のハブとして活動を進めることができるよう準備をしている。

また、宿としての機能に加えて、食事会やワーキングスペース、報告会、DVD 鑑賞等に利用されており、オープンスペースとして多国籍の若者が集う場所となっている。

代表の勝水与茶（かつみず あずさ）は「ぼくの名前はお茶を与えるで与茶なので、ゲスト達にいい思い出を作ってもらうためにお茶を与えるような、そんなおもてなしをしたいんですね。」と語る。

人間て完璧な人っていないじゃないですか。だからおっちょこちょいなくらいがちょうどいい。そんな人達が集まる人間味溢れるような空間にしたいんですよ。勝水の想いがこもっているからこそ心地よい空間が流れている。

利用者数：約600名、宿泊数：約700泊

住所：宮城県仙台市青葉区本町1丁目13-3 2 1205 号室



1.3 クラウドハウスまる

クラウドハウスまるは、気仙沼で長期活動を行うボランティアの滞在場所として利用されている。被災地では短期間のボランティアも引き続き募集しているが、一方で信頼関係を築く上でのボランティアの中核メンバーは長期で滞在することが必要となってきた。そこで、一般の宿より更に安価で滞在できるよう運営されている。



「クラウドハウス」は、そういった「ゲストハウス」と「シェアハウス」の間の機能を差した名前として提案した。

「まる」は地域と親和しながら活動していくことを意味している。

利用者数：移住者：3名、宿泊者：58名、宿泊数：約650泊

住所：宮城県気仙沼市波路上後原146-2



1.4 塩ハウス

塩ハウスは塩釜の一軒家を利用したシェアハウスとしてオープンした。



現在は仙台で活動する若者が中心となり、講演会や海外の方向けにイベント等を開催している。
最近では、1日中イベントを行い壁一面をキャンパスにして絵を描くなど、仙台に近く、自由に使える物件である利点を生かして改修を進めている。
今年度、旅館業の認可を取得し、ゲストハウスとして運営することを計画している。

利用者数：居住者：2名、宿泊者：31名、宿泊数：約250泊

住所：宮城県塩竈市泉ヶ岡9-4



1.5 MAKERS HOUSE in 押上

「MAKERS HOUSE」はNPO 法人 ETIC.（東京都渋谷区）と連携して運営する学生起業家 100 人の経営塾 MAKERS UNIVERSITY の公認シェアハウスとしてオープンした。

全国から集まる学生起業家は東京での塾に参加するために長期滞在を余儀なくされるが、その滞在場所を支援することが一義としてある。

一方で、塾生間での事業の連携により活動をより充実させ、塾生同士で切磋琢磨することのできる場所としても機能している。

1 軒目である MAKERS HOUSE in 押上は、東京スカイツリーから徒歩5分の場所にあり、日本一の絶景とともに日本一になるべく夜な夜な作戦会議をしている。

また、MAKERS UNIVERSITY 1 期生である坪井俊輔（株式会社うちゅう 代表取締役 CEO）の「うちゅうハウス」として1階を子ども向けの教室運営に貸し出している。



利用者数：居住者：3名、宿泊者：83名、宿泊数：約400泊
住所：東京都墨田区業平1丁目8-3



1.6 MAKERS HOUSE in 沼袋

「MAKERS HOUSE in 沼袋」は MAKERS HOUSE 2 号館としてオープンした。

MAKERS UNIVERSITY は 2 期目を迎えており、沼袋は 1、2 期生の交流を深めるために 2 期生にも活動を広げて運営を始めた。

現在は月 1 回の MAKERS 生の交流イベントの開催場所として使用されるなど広がりを見せてきている。

また、MAKERS UNIVERSITY 1 期生の渡部清花（WelGee 代表）の難民支援のための活動場所としても運用されている。



利用者数：居住者：5 名、宿泊者：91 名、宿泊数：約 350 泊
住所：東京都中野区沼袋 1-13-4



1.7 熊本ボランティアハウス山麓園

2016年4月の熊本地震に伴い、弊法人では気仙沼でのボランティア滞在所運営の経験を生かし熊本の支援に入った。その後、地域で活動するソーシャルアントレプレナーに引き継いだ、当初に多くの Cloud JAPAN 関係者にご支援いただいたことを反映して現在の詳細を報告書でまとめる。

(1) みなさまへ

2016年4月14日、同16日。熊本県を中心とした大規模な地震が発生しました。

わたしたち山麓園プロジェクトチームの母体となる先行チームは地震発生後ただちに熊本県益城町の被災地へと向かい活動をスタートさせました。

先の地震では多くの人的被害と畜産農家の被害、田畑など農業被害、後の6月には強烈な豪雨災害にも襲われ、熊本地震の傷口はさらに大きな被害へと拡大しました。地震の被害に合われた全ての方にお見舞いを申し上げます。

そして、熊本地震の災害支援、復旧復興支援のためにさまざまな側面で奔走してくれたみなさまに心より感謝申し上げます。

山麓園の先行チームは、益城町住民の高橋さん、川上さんと出会い、その中でボランティアのための宿泊施設の必要性を訴えて住民さんにご賛同いただき、すぐにボランティア宿泊のための施設山麓園の設置のご協力をいただきました。

地震発生当初は、家も道路も崩壊し、車中泊する避難住民が多く、交通と物流が麻痺しホテルや旅館も被災しており、災害支援するためのスタッフの宿泊施設も数が少なく地震災害の避難所支援、物資倉庫の物流作業、車中泊者のケア、倒壊家屋の片づけなどの活動をするためにもボランティアさんたちが宿泊して体力を蓄え整える場の必要性は急務でした。

おかげさまで全国から沢山のボランティア活動をされるみなさまにご利用いただき山麓園を宿泊拠点とし、益城町、西原村、南阿蘇村、御船町、熊本市東区、等多方面の災害ボランティアセンターや個人的ボランティア活動をされるみなさまに宿泊場所を提供させていただきました。

熊本地震の被災地に必要とされる存在になれたのも
熊本県の地元の皆様、山麓園の運営を支えてくれたスタッフの皆様
母体となった気仙沼架け橋、クラウドジャパンの皆様
山麓園のご近所界限の皆様、そして山麓園をベースに被災地の災害支援活動に
奔走し全力で熊本地震復興のために活躍してくれた利用者の方々のみなさまのおかげです。

心より感謝申し上げます。

(熊本ボランティアハウス山麓園 運営代表：稲田 裕一郎)



(2) 2016 年 1 年間の活動（2016 年 4 月～2017 年 3 月）

2016 年

- 4 月 14 日 熊本地震本震発生（熊本地方震源）
- 4 月 16 日 二度目の本震発生（熊本地方震源）
（その後しばらく 3～4 カ月間、震度 3～4 の大きな余震がつづく）
- 4 月 22 日 CLOUD JAPAN、架け橋メンバーを中心とするブーストチーム現地入り
山麓園の準備期間
- 4 月 25 日 山麓園ボランティア宿泊支援スタート（ブーストマネージャ高瀬璃沙）
- 5 月 15 日 福丸麻佑マネージャ就任
- 5 月 27 日 西原村 3 か所のサテライトが一か所のボランティアセンターに集約される
- 6 月 21 日 熊本全域山間部を中心とした集中豪雨水害発生
- 9 月 1 日 西原村災害ボランティアセンター鳥子からのぎく荘へ移設
- 9 月 30 日 東京にて山麓園会議（田中、高瀬、福丸、稲田）
- 11 月 26 日 西原村災害ボランティアセンター閉鎖
- 12 月 10 日 西原村会議（西原村の今後のボランティア活動について）
- 12 月 31 日 西原村仮説団地にて年越しそば振る舞いに協力

2017 年

- 2 月 19 日 大学生春季ボランティアツアー企画開始
- 3 月 31 日 大学生春季ボランティアツアー企画終了



(3) 主な活動内容

ボランティアの宿としての機能に加えて、下記の活動を行い被災地の包括的な支援を行なっている。

1) 災害復興支援活動

西原村災害ボランティアセンターを軸に、熊本地震被災地の災害復興支援活動しております。西原村の他、益城町、御船町の災害ボランティアセンターと、南阿蘇村の支援団体南阿蘇ロハスタすけあいの皆様と支援活動をしています。

そして、全国から来たボランティアさんたちの宿泊場として、施設内のメンテナンス
寝具のクリーニング、室内の清掃、キッチン利用提供、ボランティアさんの生活の支援
初めてボランティアされる方や、熊本に来たボランティアさんに現地の案内と、
ボランティア活動の説明や安全に活動するためのご案内など
初心者や大学生など危険な災害現場で安全に活動していただくための情報の提供
ボランティア後の銭湯や温泉、食事処や食材の調達場所などの案内
ボランティアを必要としている場所の案内、ボランティアに同行し案内することもあります。



2) ボランティアの案内と観光の案内

限られた時間の中で地震とは別に、熊本県阿蘇地方の大自然の環境を活かし
災害支援の最前線で疲れ切った心身を癒すため、山麓園界隈の吉無田高原の散歩
吉無田水源や西原村の白糸の滝、南阿蘇村の自然を堪能できる観光スポットの
案内などもしています。

熊本県は広大な海と山に恵まれ、地震災害の前は観光で賑わっている地域も多かったのですが
地震の後、地震被害の少なかった観光地域が復旧した後も風評被害によって観光は
全てキャンセル、修学旅行などの大きなツアーもキャンセルとなり、観光は地震の二次被害
として大きなダメージを受けています。

ボランティア活動とは別に、全国から復興支援のための旅行や遊覧も熊本地震の復興には
大きな活力となるので、ボランティア活動された方々にも次は遊びに来て阿蘇地方の大自然を
満喫していただければというご提案もさせていただいております。



3) 地域との連携

御船町吉無田高原にある山麓園は、地域の皆様との交流も大切にしています。ボランティアや観光を案内する上でもお互いの信頼関係がとても重要であり、大切な利用者の皆様に安全に安心して楽しんでいただくためにも地域の方のご協力なくては成しえないことです。

野口牧場さん、阿蘇ミルク牧場さん、野田茶園さん、吉無田水源、白川水源、川上工業さん、明神そばさんと、各地ボランティアセンターさんなどにはちよくちよく顔を合わせてスタッフの皆様と交流し活動にご協力いただいております。

近隣の皆様のご協力のおかげで山麓園利用のみなさまもスムーズな案内ができます。



(4) ボランティアセンター閉鎖にともなう今後の活動について

西原村と益城町の大きなボランティアセンター閉鎖にともない、全国からお越しのボランティアさんの数も大幅に減少、活動場所も減りました。しかし 12 月末からやっと本格的な復旧支援が始まった南阿蘇村、放置された御船町などはまだまだ始まったばかりの支援場所が多く残されており、ボランティアセンター無き今もそれぞれの活動場所で支援しているボランティアさんの支援は必要不可欠です。

水害にせよ、地震災害にせよ、機械や技術よりもとにかく人海戦術、人の手でなければできないこと、人手が沢山必要な場面は多くこれから先 1~2 年は多くのボランティアさんの支援が必要だと思われます。

直接的な片づけだけではなく、仮設団地の高齢者の生活支援、子育て世代の仮設団地での支援各地域ごとにまったく違う支援を必要としており、刻一刻と変化する現場の状況にも対応していく必要があります。



(5) 春季ボランティア活動

2017年2月19日～3月31日までの期間、2泊3日でのボランティア活動をゲストハウス架け橋主体で実施した。ボランティアを入り口として山麓園に来て、熊本の復興を知り、地域の暖かさに触れ、熊本が好きになるようなプログラムの設計をした。

1) 語り部

熊本で被災された方に牧場でお話をしていただき震災当時の様子だけでなく、現在に至るまでのまちづくりの状況や防災に関してもお話していただいた。従来のように一方的に話を聞くだけでなく、話を聞いた後に語り部さんとともにゆっくりとホット牛乳をいただいて、より震災のことを知り、深いつながりを作ることができていた。

2) ボランティア活動

西原村ボランティアセンターでのボランティア活動を実施。

人手不足の現場に入り家財の運び出しとともに、都会では経験しえない阿蘇の大自然との触れ合いや阿蘇の山や森を知る貴重な機会となっていた。

3) フリー時間の過ごし方の提案

参加者一人一人の目的やニーズに合わせて熊本での過ごし方を提案した。震災後すぐはボランティアする事が大きな目的であったが、徐々にまちづくりや地元の人との交流、美味しい食、観光等、訪れる人のニーズや目的は多様化してきている。そのため、今回のボランティアプログラムは自由に好きなことをできる時間を多く取り、架け橋のスタッフがその時間で最大限目的を果たせるようコーディネートを行った。



(6) 終わりに

2016年4月に大きな地震の被害があり、指定避難所と益城町役場も甚大な被害に遭い避難所に避難が出来ない。役場の機能停止、その後も停電、断水。

大混乱の中の車中泊生活、命の危険と隣り合わせのパニックの中を生き延びた人たち
その後も避難所生活、車中泊生活は、被災者の心身を疲弊させました。

消防や自衛隊だけでなく、本当に多くのボランティアが必要とされていました。

今もなお、仮設団地での生活を強いられている方々の先の見えない不安感のストレスは
非情に大きな問題であり、ボランティアさんはそれらを少しでも和らげる力を持っています。

これからも多くの支援が必要です。

しかし各地それぞれのリズムで、なんとか少しずつではありますが
復興の希望も見えてきています。

その希望の未来（ごくごく普通の生活の再生）をしっかりと実現していくためにも
これから多くのボランティアさんの協力を必要としています。

それが叶ったあかつきには、また大自然を堪能できる阿蘇の自然を基盤とした生活と
観光がわたしたちを楽しませてくれると信じています。

皆様のご支援に感謝しております。今後ともよろしくお願い申し上げます。

(熊本ボランティアハウス山麓園 運営代表：稲田 裕一郎)

(7) 宿泊人数と収支報告

	利用者数	支援金	助成金	助成金額
2016年3月	19人	38,000円	寄付	305,553円
4月	92人	184,000円	日本財団	890,000円
5月	86人	172,000円		
6月	71人	142,000円		
7月	67人	134,000円	大和証券	300,000円
8月	113人	226,000円		
9月	130人	260,000円		
10月	40人	80,000円	前川謝恩会	500,000円
11月	71人	142,000円		
12月	61人	122,000円		
2017年1月	55人	110,000円		
2月	56人	112,000円	活動参加費	240,000円
3月	50人	100,000円	活動参加費	285,000円
合計	911人	1,822,000円		2,520,553円

1.8 2017年度の広がり

今年度についても引き続き全国の空き家の運営支援を行うべく活動を広げている。

現在、すでに決まっている物件について紹介する。

1.8.1 CARAVAN FLAKE in 伊豆大島

東京都の伊豆大島で廃業した旅館を改修してゲストハウスにするべく改修している。

2017年6月にオープン予定で、運営は近藤佑太郎(株式会社 CARAVAN JAPAN 代表取締役)氏にお願いする。



1.8.2 ちょこっと沼ハウス（仮） in 気仙沼

NPO 法人ユナイテッド・アース、株式会社十人十色不動産と連携して運営する移住者のための物件。移住に必要な家・車・仕事の3種の神器を揃えたシェアハウスとして6月からオープン予定。

顧客の多くはお試し移住者となるため、地域との連携に架け橋スタッフが入ることにより人の温かさから、最終的な移住を目指している。

2. ソーシャルアントレプレナーが集う場の運営支援事業

(1) みなさまへ

皆様におかれましては、いつも多大なるご指導ご協力賜りまして誠にありがとうございます。

震災から6年が経ち、架け橋のママスタッフも含め地域住民が地域住民の力で復興に向け一歩ずつ前に進む姿を見ることも多くなり、日々嬉しく感じています。一方、未だ公営住宅から地域に溶け込むことができず孤立している住民がいることも事実です。今後とも地域の人々で笑い合い、助け合う街、気仙沼になるよう尽力して参りますのでどうぞ宜しくお願い申し上げます。

2016年度は「復興支援からの脱却」の年でした。ボランティアが必要とされる以上は復興は成し得ないという事実に基づく、ボランティアの宿としての機能をもつゲストハウス架け橋は必要とされなくなることがゴールでした。同時に、ボランティア活動を通して地域の住民と全国の若者が交流することによって双方の日々の生活の充足感が増すという震災当時の副産物のような機能もありました。復興した後の綺麗な街に人が来ない、住んでいる人が幸せを感じない、そういった復興には意味を感じないのが正直な所感です。

そこで宮城県、トヨタ財団の皆さまはじめとした皆さまのご支援を賜り、「第2のふるさと、気仙沼」として新たなスタートを切りました。今では、多くの地域住民の笑顔が溢れ、全国の若者がなんども足を運んでくれるようになった架け橋を微笑ましく見えています。

2017年度は私たちも支援者から脱却し、共に気仙沼市民として地域を盛り上げていきたいと思っておりますので、どうぞ今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

気仙沼ゲストハウス“架け橋”代表 田中 惇敏

(2) 1年間の活動

1) 改修工事～認可取得まで(2016年4月-12月)

2016年

- 4月3日 ゲストハウス架け橋1号館営業終了
- 5月31日 FAAVO 終了 最終額 2,085,000円
- 7月7日 ゲストハウス2号館改修工事開始、施工ボランティア受け入れ
- 11月15日 改修工事終了
- 11月28日 完成お披露目会開催
- 11月29日 気仙沼みなみ商工ネット忘年会開催
- 12月3日 絵本カフェ架け橋スタッフ(子連れのママ)求人開始
- 12月6日 ゲストハウス架け橋プレオープン、内覧会開始
- 12月7日 旅館業営業許可及び飲食店営業許可取得

2) 認可取得後～現在まで(2017年1月-3月)

- 1月6日 ゲストハウス架け橋オープン、宿泊受付開始
- 1月17日 絵本カフェ架け橋開始
- 1月20日 ちょこっと呑み屋開始
- 2月19日 春のボランティア活動開始(2泊3日、全12ターム)



(3) 主な活動内容

1) ゲストハウス架け橋改修工事

2016年7月7日～11月15日までの期間で、ゲストハウス架け橋の改修工事を行った。みんなで作るゲストハウスを目標に、全国から集まるボランティアさん、地域の皆さん、述べ100名以上のご協力をいただいた。便槽を埋める工事と下水配管以外は専門家の指導を仰ぎながら、ボランティアさんと協力して実施。壁の色や素材一つ一つを相談しながら、こだわって作り上げた。完成お披露目会には助成をいただいている県庁様、トヨタ財団様、気仙沼みなみ商工ネットの皆様、そしてお世話になっている近隣住民の皆様にお越しいただいた。

2) 改修工事参加者の声

○岡田卓也さん(近隣高校教師)

私が架け橋の事を初めて知ったのは Facebook でした。「うちの近くで何かやってる人がいるなあ。偉いなあ」と思ったのが第一印象です。そしてクラウドファンディングでわずかばかり協力させてもらっていました。そのうち偶然お友達から「おかたくさんの家の近所で施工のボランティアを募集しているから一緒に行こうよ」とお誘いがありました。僕はもともと災害ボランティアが趣味でして、どんな人たちがやっているのか興味もありましたし、自分が工業高校の教員で電気工事士も持っているので自分の技術が役立てれるのではないかと思います一緒に行きました。

行くと3人の若者と1人のおじいさんが木を切ったり家の壁を塗ったりしていました。一緒に作業をしながらお話を聞いていると、被災地の復興に対する熱い思いを持った素晴らしい人たちでした。

夏の暑い中、汗をかきながら石膏ボード張り、しっくい塗り、壁剥がし、電気工事、2段ベッド作り、電気配線工事など、工業教員とはいえ初めてやる作業も多かったのですが教えてもらいながら一生懸命頑張りました。他のボランティアさん達とも交流しながら楽しくできてお友達も増えました。

家が近いこともあり、その後も何度か参加してもらい、完成し、オープンした時はただの一お手伝いのくせに自分のことのようにうれしく思いました。今は近いのでお泊りすることはありませんが、ランチや居酒屋として利用させてもらったり、春休みに各地から来たボランティアさんたちとの交流会などに参加してもらっています。夏休みに熊本に復興支援ボランティアに行ったときはここの姉妹店の「山麓園」さんにお世話になったり、ここでできたご縁が広がって、神戸の実家に帰った時に、関西から来ていたボランティアさんとの交流を深めるなど、2次的に人の輪が広がっていき、まさに人と人との“架け橋”になっているなあと感じています。

今は二人の若者が中心になって運営されていますが、これからも気仙沼だけでなく、東北や日本全体の“架け橋”になっていけるように、僕も応援していきたいと思います。

架け橋スタッフのみなさん、一緒にボランティア作業したみなさん、架け橋をご利用のみなさん、ありがとうございました。これからもよろしくお願いします。



○ 村上和佳奈

今回、微力ながらお手伝いをさせていただきました村上和佳奈です。ボランティアは釘抜きから始まり、珪藻土塗りや藍染め等様々なことを経験させてもらい、とても貴重な体験でした。まずやってみる！という気持ちが少しついたような気がします。少しずつ出来上がっていく中でも、スタッフさんの「これからも本当の完成はなく、かわっていく」という言葉に、変化をおそれず、進んで行く強さを感じました。

また、様々な方との関わりの中で、地元でありながら、改めて「気仙沼の魅力」について知ることもあり、故郷の大切さにも気づくことができました。いつもあたたかく迎えてくれる架け橋スタッフさん、様々なボランティアの方々との出会いに感謝します。ありがとうございました。

3) 活動写真

(上) 地元の若者による木材の塗装の様子 (下) 関東の学生団体による壁塗り



(上)作業終了後の懇親会の様子 (下)地元住民のボランティア参加者の様子



(4) 地域との連携

2016年6月より気仙沼みなみ商工ネットの会員となり活動。若者が得意なパソコン作業を担当し、月に1回地域新聞の発刊を担当している。地域の夏祭りやまちづくりワークショップ、語り部視察研修などにも積極的に参加している。

2017年1月からは代表の田中が階上まちづくり協議会の階上健康・子育て・スポーツ部会の事務局となり、階上セントラルパーク構想に若い視点及び、地域の母親の意見を届けるべく活動を行っている。

1) 地域新聞（縁 ひとまちづくり新聞）

地域新聞は下記よりダウンロードできる。

<https://minaminet.jimdo.com/会報-ひとまちづくり新聞-1/>

(1) 8月号 2016年(平成28年) **ひとまちづくり新聞** 発行第36号

階上に若い力を！ 気仙沼ゲストハウス架け橋

今回は新規会員の「気仙沼ゲストハウス架け橋」代表の田中博敏さんを紹介します。田中さんは福岡県出身、震災後ボランティアで気仙沼を訪れ2014年より階上で生活しております。震災後ボランティアに来てお金のない学生に対して宿泊場所（気仙沼ゲストハウス架け橋）を提供し、ボランティア活動のコーディネートを行っています。自分自身が気仙沼の階上地区に移住を決めた最大の要因はこの地区に住む人々の温かさ、自分のことを本当の息子のように思い優しく温かく時には厳しく支えてくれる階上地区の皆様。そんな大好きなこの地に今後たくさんの人々が訪れ、活気のある町へ復興していくように、自分のようにこの気仙沼市を、階上地区を好きになり、第二の故郷だと思える若者が増えてほしいと願い、そんな思いの元、9月にNPO法人クラウドジャパンを設立、10月には低料金を設定し泊まれる宿泊施設をオープンさせる予定です。現在階上地区に多くのボランティアやスタッフや多くのボランティアさんの手を借りながら改修中ですので、市外、県外から泊まりにくる人だけでなく、地域の方が集まる場所になるよう、集を担っています。

飲食の提供や絵本の設置など様々な機能を検討しています。この場所では階上に住む人々と、地域外からくる人々とが交流し、多くの人々に階上のよさを感じてもらいたいと考えています。商工ネットでは6月より広報副部長に就任、新聞の発行やホームページの編集を担当しています。

発行元
気仙沼みなみ商工ネット
〒988-0222
気仙沼市長磯船原33-1
電話 0226-27-3720
<http://minaminet.jimdo.com/>
代表者 川部達弘志
(川部達弘志)
編集者 田中博敏
発行第36号

メール: hukami.yay@yahoo.co.jp



海への森の植樹祭

震災後から鎮魂の森の植樹、沿岸再生の森の植樹、未来の誰かの命を一人でも多く救えるようにと続けてきた植樹も5年目を迎えます。復興工事も進む中、防風林が無い為の強い風と塩害、暮らす為の環境を再生する取り組みも必要とされています。『第5回海への森の植樹祭』は、住環境と農地を垣書きから守る為の植樹を兼ねた、次の世代へ引き継ぐ為の植樹祭として開催いたします。今年は震災と放射能で大きな被害を受けた中、たくましく立ち上がった、たくましく立ち上がった子供たちも迎え、被災地間の交流をかねた植樹祭と致します。地元の方々の参加をお待ちしております。



ゲスト 大城ハネサさん
南相馬・杉並トモダチプロジェクト

＊開催日 9月24日(土)
＊雨天決行
＊場所 海への森をつくる会事務所前(波路上)
＊時間 午前9時受付、10時植樹
＊参加費 なし
＊定員 400名
＊持ち物 飲み物 タオル
＊帽子 長靴または運動靴
＊雨天時雨具
＊申し込み お名前・参加人数・電話番号・メールアドレスをご連絡下さい
＊連絡先
電話 2519067
FAX 2519232
Mail info@jimibenomori.jp
jimibenomori.jp

地域新聞の一例。架け橋も掲載して頂いた。



Cloud JAPAN

TEL 0226-29-6514
Address 〒988-0224 宮城県気仙沼市長磯船原林55番地3

2) 活動写真

(上) 新潟中越語り部研修の様子 (下) 地域住民による架け橋の完成祝い会兼忘年会



(5) 絵本カフェ架け橋

地域の母親の雇用と居場所づくりを目的に、週4日、ゲストハウスの居間スペースを絵本カフェとして運営を行う。子連れで働くママ10名を雇用しともに立ち上げを行い、現在は地域の親子が集い、食事をし、交流する場となっている。また気仙沼には大学がないため、普段ほとんど大学生と交流することがないが、ゲストハウスで子どもと大学生ボランティアの交流も生まれている。

1) 働く母の思い

○ 尾形幸さん

私は妊娠を期に仕事を辞め専業主婦になりました。長男が産まれた時には、定期的に近所の仮設集会所に遊びに行き、子供を遊ばせながらママ友と話をし、家事や育児を楽しみながら生活していました。しかし、次男が産まれてから、外食しても子供達が騒いだ時には、他のお客さんの目が気になり、最後まで食事をせず店を出たり、買い物へ行っても長男が走り回るのを叫びながら追いかけたり、2人連れて外に出るのが大変で、仮設集会所も閉鎖になったことから、家から出ず引きこもりがちになっていました。

子供が1人の時とは違い、上手くいかない家事や育児に疲れ、子供達に対してもイライラしてしまうことから、「いっそ保育所に預けて働こうか。」と思うことが何度もありました。でも、やっぱり少しでも長く子供達と一緒に過ごしたい。そんな葛藤の中、新聞記事で見つけた架け橋の存在でした。

私自身少しでも外に出て他の人と話す機会がもてるのではないかと、子供達も様々な経験が出来るのではないかと求人に応募しました。

しかし、子供達と一緒に出勤して、きちんと仕事出来るのか不安はありました。案の定、長男は全くお手伝いをせず遊び回ったり、機嫌悪いとずっと泣き騒いでいます。次男は人見知りの時期に入り私じゃないとダメで、ずっとおんぶしているから、なかなか思うように仕事が出来ず、一緒に働くスタッフの負担も増え、申し訳なく思っていました。

でも、子供達がグズったときには、お使いやデスクワークなど出来る仕事を与えてくれ、少しでも働きやすいように考えてくれたり、戦力外で申し訳ないと思っている私の気持ちを察してくれ、仕事をしてきた日には気遣いの連絡をくれたり、大丈夫だからこれからもよろしくと言ってくれるスタッフ達。

まだまだ迷惑をかけっぱなしだけど、徐々に子供達も慣れてきて、スタッフみんなが子供達を見てくれるおかげで、私自身リフレッシュにもなり、子供達に対して気持ちに余裕を持って接することができるようになってきました。

また、お客さんとして架け橋を利用する際も、他の店だとなかなかゆっくりできなくても、スタッフや宿泊している方々が子供達と遊んでくれたり、たくさんの絵本、オムツ交換ベットなどアメニティも充実していたり、入り口ガードなど安全面も安心できることから、ゆっくりと食事やママ友との会話を楽しめる居心地のいい空間に魅力を感じています。

架け橋との出会いで、私も子供達も救われた部分がたくさんあります。また、私自身スタッフの1人として、同じような状況のママや子供達の架け橋になれたらいいなと思っています。



2) 活動写真

(上) 掃除をすることどもの様子

(下) 大学生と絵本カフェを利用することどもの交流



(上) 親子の交流の様子 (下) 食事の様子



(6) 春季ボランティア活動

2017年2月19日～3月31日までの期間、2泊3日でのボランティア活動をゲストハウス架け橋主体で実施した。ボランティアを入り口として気仙沼に来て、気仙沼の復興を知り、地域の温かさに触れ、気仙沼が好きになるようなプログラムの設計をした。

1) 語り部

気仙沼で被災された方に初日の夜語り部としてお話をしていただいた。震災当時の様子だけでなく、現在に至るまでのまちづくりの状況や防災に関してもお話していただいた。従来のように一方的に話を聞くだけでなく、話を聞いた後に語り部さんとともに鍋を囲むことで、より震災のことを知り、深いつながりを作ることができていた。

2) ボランティア活動

特定非営利活動法人浜わらす様のご協力により、「蔵内之芽組」と「合同会社花浜」でのボランティア活動を実施。人手不足の現場に入りわかめの作業を手伝うとともに、都会では経験しえない漁師さんとの触れ合いやわかめやメカブの生産過程を知る貴重な機会となっていた。

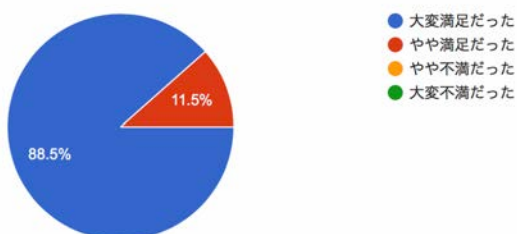
3) フリー時間の過ごし方の提案

参加者一人一人の目的やニーズに合わせて気仙沼での過ごし方を提案した。震災後すぐはボランティアする事が大きな目的であったが、徐々にまちづくりや地元の人との交流、美味しい食、観光等、訪れる人のニーズや目的は多様化してきている。そのため、今回のボランティアプログラムは自由に好きなことをできる時間を多く取り、架け橋のスタッフがその時間で最大限目的を果たせるようコーディネートを行った。

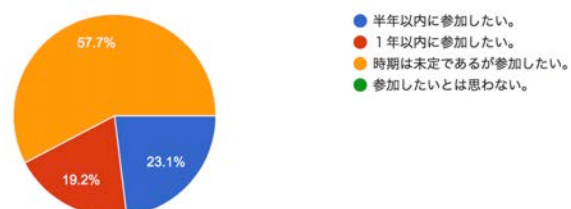
4) アンケート結果

参加者77名に対して事後アンケートを取り、下記の結果を得た。

今回の活動の満足度は？



今後再び、CJ主催のボランティアに参加したいか？



5) ボランティア参加者の声

○ 語り部さんの話を聞いて(匿名)

- ・ 東日本大震災が起こった時、私は中学 1 年生でした。日本はよく地震が起こるため地震に対する恐怖というものはそれほど感じていませんでした。しかし学校の木が大きく揺れ、先生が「机の下にもぐりなさい」といった時、今回の地震は普通でないと感じました。3～4 日停電になったり、ならなかったりと不自由な生活を送りました。「慣れ」というのはとても怖いんです。自分の命は自分で守れるよう、しっかりと避難場所を確認し、とにかく逃げようと思いました。
- ・ 一緒にこたつに入って近い空間でお話をお聞きするだけでなく、私たちの夢についてこちらからお話を聞いていただくことができるととても嬉しかったです。また大和田さんとお話したいです。

○ 全体の感想 (個人のフェイスブックで発信してくれた内容より抜粋。掲載の許可取得済み)

・ 川真田夕起

昨年初めて気仙沼を訪れるとき、実は結構びくびくしていました。自分が恐ろしく人見知りするたちであるため、初めて知り合う人たちと上手く話せるか不安だったのもその理由の一つですが、被災地を訪れるのが初めてである私にとってそこは未知の場所で、本当にどうすればいいのかわからなかったから、というのが一番大きいです。

被災者のお話を聞きたいけど、お話に対してどんなリアクションを取ればいいのかわからない。今の復興の様子を知りたいけど、知ったときどんな感想を抱けばいいのかわからない。私が行っても、私の想像では到底及ばないような思いを抱える人の心を、土足で踏み荒らして帰るだけになるのではないだろうか...と思っていたからです。今はそこまでは思いません。気仙沼で出会った人たちが、みんな温かく迎え入れてくれたからです。ただそれでもやっぱり「私はどうしたらいいんだろう」と考えることがいろいろあります。

たとえば。奇跡の一本松を見に行ったとき、そこを訪れた人が書き込む感想ノートを発見しました。パラパラとめくってみると「感動しました」「またここに沢山の松がはえますように」「一本松頑張って」などの前向きなメッセージが。感動しましたって何に感動したんだろう。たった一本でも松が残ったこと？でも本当はここにはもっと沢山の松があった。悲しいことがあって今の姿になっている。この松はもう人間がお金をかけて手を加えて無理やりそこに立たせているに過ぎない。この書き込み、日付はかなり最近になっているけど、もしや一本松が枯れたことを知らずに書き込んでいるんだろうか。たった一本の、もう本当は枯れている松の木を大事にするより、一人でも多くの人が助かるようにお金使った方がずっといいと思わない？でも、シンボリックなものに惹かれる気持ちは理解できる。この松が次の世代に災害を語り継ぐためのキーになるだろうことも理解できる。一本松を見に来た人が落としていくお金もあるだろうとは思う。でもそれもいつか飽きられるだろうことも想像できてしまう。色々な立場の考え方があっても、その内容も理解はできるけど、わたしはどれに共鳴すればいいんだろう。誰の考えも否定できなくて、でもうまく共感もできなくて、でもでも...って思っているうちに、何も書かずにノートを閉じてしまっていました。



その他にもたくさん、考えることがありました。そしてもしかしたら私が今ぐるぐると考えていることは、今後の自分の大きなテーマとなることかもしれない、と気づきました。

今まで自分は何をしたいんだろう、と漠然と思い悩み続けてきましたが、形はどうあれ私が考えたい中身はこういうことなのかもしれない、と。このテーマを考えるためにも、気づきを与えてくれた気仙沼にはまた行かなくてはならないと思っています。そして沢山の人と出会ってお話したいです。気仙沼の人はやっぱり大阪や徳島の人とは違います(大阪や徳島の人を悪く言いたいものではありません)。彼らのことをもっと知りたい。また美味しいものが食べたい。それと、まだ行ったことのない人には、ぜひ、自分の足でその土地を踏んで、空気を吸って、目で見て耳で聞いてきてほしいのです(あと食べ物超美味しいからいっぱい食べてきて)。私は皆さんが気仙沼で何を感じるのかとっても興味があります。ぜひ、行って感想を聞かせてください。

・武川涼香

今日で、東日本大震災から6年。私は、この前、漁師さんのわかめ作業のボランティアということで、初めて気仙沼を訪れた。でも、行きたいと思ったのは、ボランティアしたい！という思いだけではなくて、震災のこと、気仙沼のことをもっと知りたい、地元の方と話したい、！だから、ボランティアで行ってきただけと言うのは、なんか違う気がする。

気仙沼では、語り部さんの話や、市役所の方が直接、市民に、気仙沼の現状、これからのことについて、話してくださる講演会にも参加できた。あと、4年で大きい工事を完成させなければ、気仙沼はダメになると言われていた。でも、仙台までいく大きい道路より、渋滞がひどいから、小さい道路を早くつくってほしいなど、市民の方が、意見を述べたり、質問したりする時間もあり、気仙沼をもっと良くしようという熱い思いが伝わってきた。130年も続いている亀の湯も、かさ上げをするため、4月には、閉店してしまうそう。残念だけど、また再開したら、行きたいと思う。他にも、まだまだ、気仙沼に行って、学んだことや、感じたことはたくさんある。被災地の状況とかは、テレビで見ていたけど、初めて、現地を訪れて、そうだったんだと知らないことが、多かった。何でもっと早く来なかったんだろうと後悔した。でも、今、来て、本当に良かったと思った。気仙沼はいいところ！海がきれいで、みんな優しく、もっと一緒にいたい、帰りたくない、また来たい！って思った。だから、また気仙沼に行きます。

・山崎あゆ

3月1日から3日までの3日間、「ワカメ漁手伝いのボランティア」という名目で、宮城県気仙沼市を訪れていました。実は、私が気仙沼を訪れたのは今回で2回目です。前回来たのは、2011年8月のことでした。あの頃は、東日本大震災から半年も経っておらず、気仙沼は被災物(がれき)が積み上げられ、地盤沈下で冠水した状態でした。人の姿は見られず、いるのはカモメとハエだけ。津波が来る以前の姿を知らない私としては、「本当にここに人が住んでいたのだろうか」と思ってしまうほどでした。この時、私はボランティア活動をしませんでした。

もちろん、現地でボランティアを行いたい気持ちはあり、自分で探してはみたのですが、当時中学生である私を受け入れてくれるところはなく、親も反対したためです。結局、直接的なボランティア活動は行わないものの、「現地へ行って、お金を使うことが支援につながる」と信じて、被災地を訪れました。しかし、直接その惨状を目の当たりにし、また地元の子供たちが一生懸命がれきの撤去作業



を行っていると言って、とてつもない後ろめたさに襲われました。もっと探せばボランティアができたのではないかと私は何をしに来たのだろうか？野次馬？冷やかしか？

そんな中、地元の方とお話できる機会もありました。自宅は無事だったものの、奥さんは津波に流され亡くなった方でした。しかし私は、申し訳ない気持ちと、他人の心の深い傷に接することへの恐怖とで、その方と会話すらできませんでした。関西に戻ってからも、後ろめたさは残っていて、「被災地を見てきた」ということを、あまり人には言えませんでした。「ボランティアしなかったの？」と言われるのが怖かったです。

あれから、5年と半年ほど経って、再び被災地を訪れました。

気仙沼は、がれきはほとんど撤去され、地盤の隆起やかさ上げによりもう冠水しておらず、新しい建物が沢山建っていました。宿泊していたゲストハウスで、地元の方のお話を聞きました。

津波が来る前、波が引いて普通見えないはずの海底が見えたこと。必死に高い所へと逃げたこと。津波が予想以上の高さになったこと。避難してからしばらく間、限られた物資を分け合ったこと。現在取り組んでいること、これからすること。津波の体験談を、被災した方から直接聞くのは初めてでした。これによって分かったのは、「直接、被災者と関わらなければ、被災地を本当に理解することはできない」ということです。

中学生の時、私は東日本大震災関連の新聞記事や、ニュースを積極的に見聞きし、現地にも足を運んだにもかかわらず、津波被害は現実として受け止められず、物語のように感じていましたが、それは、罪悪感と恐怖心から、地元の人との交流を拒んだことが原因にありました。(ただ、震災から半年も経っていないときですから、被災者の中でも話したくない方がほとんどだったのではと思います。幼い好奇心から、被災者の心の傷を抉るようなことをしなくてよかったと感じています。)

それから5年経って、地元の人と交流して、気仙沼を知りました。何気なく挨拶を交わした人も、きっと津波を見たのだろうし、地元の人同士の会話の中にも「6年前の震災」という言葉が出てくる。車やBRTに乗っていると、津波が来ていなければ存在しないもの(大量の土嚢、使われていない線路、高い防潮堤など)がそこらじゅうに見えてくる。本当に、この町を津波は襲ったんだ。と強く意識させられました。

そして、もう一つ。私が、震災後に一度気仙沼に来たにも関わらずボランティアはしなかった、と伝えると、地元の方はこう仰いました。「そんなの大した問題じゃない。堂々と『被災地を見てきた』と言いなさい」なので、言います。私は5年前、気仙沼、南三陸、女川に行って、被災地のこの状態を見ました。(ガラケーで撮影したので、画質は超絶悪いですが。)

最後に。今回、地元に住む人だけでなく、他の場所から移住して、気仙沼に貢献している方々に出会いました。彼らは、私が今まで出会ったことのない人種(私の周りには、私を含め保守的な生き方が多い)で、大変尊敬できる生き方をしていました。

私は臆病なので、そのような思い切った人生に踏み込む勇氣はまだないですが、「被災地を(他の人よりかは)知った者」として、やるべきこと、できることをしなければと思います。

まずは、気仙沼の宣伝！気仙沼は優しい人ばかりだし、海はきれいだし、食べ物はおいしいし最高です！夏にまた行くつもりです！気仙沼の方々、ありがとうございました。



6) 活動写真

(上) ワカメボランティア中の様子 (下) 語り部さんを囲んだ食事会の様子



(上) 全国から集まった大学生同士の交流 (下)絵本カフェのこどもとの触れ合い



(7) インターン生の受け入れ

2017年2月～3月末の期間で、ゲストハウス架け橋のインターン生6名の受け入れを行った。目的は短期滞在で過去に来てくれたことがあり、また来たいと思っている大学生が、1週間以上気仙沼に滞在できる環境を作り、今まで以上に気仙沼を好きになってもらうことである。

ゲストハウス架け橋での簡単な業務(掃除、洗濯、お客さん対応)をお手伝いしてもらいながら、各個人が気仙沼でやりたいことを行ったり、自分の生き方や進路を見直したりできる機会になるよう支援を行った。

1) 感想(フェイスブックより抜粋。掲載の許可取得済み)

○ 吉川絢乃

架け橋に来るのは、昨年の春からの3回目です。1度目は被災地と呼ばれる場所を自分の目で見たくて、2度目はりさちゃんに会いたくて、今回は、ただ、気仙沼の美味しいものと架け橋での素敵な出会いに期待して訪問しました。滞在中は、絵本カフェやゲストハウスのお手伝いをしながら、ワカメ漁師さんのところや3月11日からのヒカリというプロジェクトでボランティアに参加させていただいたり、浜わらすさんでのキャンドル作りやイベントでのスプーン作りといった体験をさせていただいたり、地元の方から全国から泊まりに来た宿泊者さんまで様々な方とお話をしたりととても充実した日々を送ることができました。

特に大きな目的もなく架け橋に来た私ですが、日々を過ごしていく中で一番感じたのは、つながることの嬉しさと大切さです。絵本カフェのお母さんと子供たち、語り部さん、夜飲みに来るおんちゃん、架け橋に泊まりに来たみなさん、イベントやボランティアを通して出会ったみなさん…。そして、あつさんももさん。たくさんの顔が思い浮かびます。たくさんの魅力的な方々と、架け橋を通して出会うことができました。今の生活についてのお話から夢の話、信念の話など様々なことをお話ししました。私は聞いてばかりでしたが、面白いお話ばかりでとても楽しかったです。

楽しそうに話す姿、ときに熱く真剣に語っている姿はとても魅力的でした。特に、理想や信念について語っている姿に、私は圧倒されました。すごいなと思いました。私はまだまだ未熟だなと痛感しました。自分がやりたいことは何なのか、自分の中にあるもやもやを言語化して整理していかないといけないと思いました。この時期に様々なことを聞きながら色々なことを考えて、自分を見つめられたのは本当に良かったなと思います。

そして、滞在中にあった特別な日について。私は今回、3月11日を初めて被災地と言われている場所で過ごしました。この日、午後2時46分が近づくと、街中に放送が響き渡ります。そして1分間、祈りを捧げます。夜になると、3本の光の柱が天に届きます。

愛知ではニュースなどでは取り上げられるものの、どこか他人事で、他の日と変わらないただの一日になってしまいがちですが、ここではまだまだ特別な日。大切なものを震災によってなくした方がたくさんいます。そんな方ともここに来て知り合ったこともあり、私にとって3月11日は他人事ではなくなりました。

滞在中は、3人の語り部さんからお話を聞くことができました。当時のこの地の状況やその時の心情はひどいもので、何度聞いても耳を塞ぎたくなります。しかし、語り部さんが共通してお話ししてくれたのはそれだけでなく、「これから震災にあった時にどうすればいいのか」「気仙沼を盛り上げて



いきたい」といった前向きなものでした。心の奥には抱えるものがありながらも、未来に向かっていくように感じました。

いつ、どこで天災は訪れるのかわかりません。東日本大震災では、人災によってなくしたと言われる命もあります。少しでも多く、できればすべての命を天災によって失われないためには、私たち自身が天災に今から向き合う必要があります。

あつさんが、絵本カフェの子どもたちを見て言っていました。「この子たちはあの震災を知らない」と。あの事実を記憶と共に次の世代へとつないでいく時がきているのかもしれない。

人とつながる、未来につなげる。今回、様々なつながりを体感しましたが、あくまで周りのお力添えがあつてのことでした。先にも述べましたが、滞在中に一番感じたのはつながる嬉しさと大切さです。次は自分の力で人と人をつないだり、記憶を次の世代へと伝え、未来へとつないでみたいと今は考えています。

愛知に帰って来て、知人に「今の東北はどうなってるの?」「あの日はこんな風だったよ」と声をかけてもらうことがあります。私が気仙沼に赴くことによって、気仙沼と愛知をつなぐことができたのです。気仙沼では得てばかりで何も返せず帰って来てしまったと思っていましたが、声をかけてもらって、少しでも私が行ったという意味があるのかもしれないと感じられ、嬉しく思いました。

架け橋からつながったすべての方に、心から感謝しています。好きな人でいっぱいです。ありがとうございました!また今度、おいしい食べ物と素敵な出会いを求めて、架け橋に帰ろうと思います。どんな絵本になっているのかも楽しみです!

○ 太田春菜

いろんな巡りあわせで、気が付いたらたどり着いたゲストハウス「架け橋」。なにをやりに来たのかというと、「気仙沼と外国人を繋ぐ新しい回路づくり」です。

なぜ、気仙沼に外国人なのか。東京で当たり前の一般論で進めることはできないな、と気仙沼にきてすぐに気づきました。一般論ではなく、「気仙沼で」説明できる言葉が必要だったのです。なぜ、なぜ、なぜ、と問いつけた約4日間でした。なんで外国人なのだろう。この4日間は、自己紹介で「外国人」というフレーズを使うことが怖くなっていました。同時に、前に進めなくなる自分がいました。

「被災地としての気仙沼」と見ていたからです。

気仙沼では色んな人に会いました。皆目がきらきらしていて、やっていることも面白くて魅力的で、この方々を開いていきたい!伝えたい!と思いました。一方で、「被災地としての気仙沼」ではなく「わくわくが詰まった気仙沼」として企画をするのは、いいことなのかとわからなくなる自分がいました。この疑問を抱いていると認識するまでは、無意識に自分の中での「わくわくする気持ち」を抑えていました。「わくわくする気持ち」以前に、気仙沼を知らなくてはいけない、と思っていたのです。でも、「気仙沼」を知れば知るほど自分の中での「わくわく」は封じ込まれ、気づいたら辛くなっていました。そこで、自分は「被災地としての気仙沼」を意識しすぎていたことに気づくのでした。そうしたときに、私が気づいたことは、私が大事にしたいのは「わくわくする心」や「心のトキメキ」であること。果たして「わくわくする心」「心のトキメキ」を気仙沼で感じていいのか、疑問を感じ



ました。気仙沼に住む方々は気仙沼をどう見てほしいのだろう。気づいたら気仙沼で知り合ったとある人に連絡していました。その方に今思っていることを伝えると、何事も「楽しみながら」やるのが大切。心のトキメキのままに動いて、伝えたい楽しみを見つけていくことがいいのかもね、と。そして、被災地として気仙沼を見て生きている人は実はそんなにいないんだよ、と教えて下さいました。むしろ、南海トラフきたら大丈夫かな、避難訓練ちゃんとしてるのかな、とほかの地域を心配しているステージにきているんだよ、と。そんなに難しく考えなくて大丈夫、と。そこでわたしは、「ボランティア」「支援」という切り口ではなく、私は「地域の宝物を発掘していく」という自分もわくわくするような切り口から気仙沼を盛り上げていきたいと思っているんです、という話しをしました。すると、「いいね、素晴らしいね」と言って下さったのです。このようなお話をして、自分のやろうとしていること間違っていなかったんだ、という嬉しさとほっとする気持ちがありました。

最終日の前の夜、私は気仙沼という地で外国人にこだわりを持つ理由が見つかりました。それは、自分と正反対なのが外国人だと思っていたからでした。一瞬一瞬を大事に目の前のことに驚き、喜び、感謝する、感動経験を共有して、気仙沼のポテンシャルを引き出してくれると思ったのです。自分は、「この地ではどのような振る舞いをしたらよいのだろうか」と考えてしまうタイプでした。そうすると、おもいっきりその場を楽しむことができません。だからこそ、思い悩んでいました。そして、歴史の一つと認めながらも、「今」この瞬間を大事に、おもいっきり楽しんでくれるのが外国人さんなのか、と思ったのです。こうして、私の言葉で説明できる外国人を呼びたい理由を見つけられたのです。最終日まで、思い悩みながらも、自分がわくわくするような方々にたくさん出会っていました。そして、最終日、やっと、そのわくわくする人達を伝えたい！と自信をもって言えるようになりました。さらに、紹介しきれていない面白い人がまだまだいると言われ、今度来るとき紹介するね、とおっしゃって下さいました。どんなわくわくに出会えるのだろうか、自分自身とても楽しみで、楽しみながらそれが伝わる仕組みを作りたいです。気仙沼には宝物がたくさん詰まっています。どうやって宝物発掘しようかな、どうやって伝えようかな、考えると心がわくわくします。最終日の夜、架け橋の代表の田中さんとの会話でこんなことを言いました。「わくわく最先端の街、気仙沼にしたいです！」気仙沼は、わくわくが詰まった街でもあり、自分自身でわくわくを作っていける街でもあると思っています。今回のインターンでの一つの目標、気仙沼を好きになる、は満点です。しかし、そこに時間をかけてしまって、その次のステージに行くことはできませんでした。東京とは一味違う空気の流れる気仙沼。まだまだ東京の考えが根付いていて、焦ってしまいがちな自分がいるのは事実です。成果を形にして持ち帰ることはできなかったからです。落ち込む自分もちろんいます。けれども、大切なことは、自分の身を置く場所によってなにを大切にするかを変えていくことだと思いました。成果としてなにか大切だけど、まずは「楽しみながら」この言葉がずっと心に残っています。そうした意味で、今回気仙沼での時間を大切にできたことは正しかったのかな、と思います。無理やり成果を出そうとしなかったのは「気仙沼」という地の空気の流れに乗れた証拠かな、とも思います。「目的を持ちすぎると、失敗する」はじめに田中さんに言われた言葉とは、このことだったのかな、と思います。気仙沼で、気仙沼で生活する方々に会って、本当にかげがえのない時間を過ごさせて頂きました。嬉しいことは、今度はお世話になった方々の顔を想像して、わくわくしながら、気仙沼に行くことができることです。今回のインターン期間は終わりましたが、自分の中ではこれは



まだスタート地点に立ったばかりの感覚です。

まだまだ挑戦したいです。気仙沼と、気仙沼に住む方々がとっても好きになったので。わくわくもたくさんあるし、自分がほっとできる場所でもあります。「なにかしている自分」だけでなく「なにもできない自分」も認めて受け入れてくれます。それが、もう一つ私が気仙沼に惹きつけられる理由でもあるのかな、と思います。「わくわく最先端の街、気仙沼！」

カタチにできるかも！！！！！！

このわくわくする気持ち色んな方々と共有したいです。

「架け橋」ほんとにすごいです。素敵な場所、素敵な方々が集まる場所架け橋。ほっとできる場所、架け橋。そうした空間を作り上げている田中さんとももさん、本当に素敵だと思います。そんな「架け橋」で、この先わたしも素敵な「架け橋」になれたらいいなあ、と思います。本当に本当にありがとうございました！

○ 木村達海

1週間のインターンはあっという間でした！！普段はゲストとして宿泊していたので不思議な感じがしていました。でもいつもと同じように迎え入れてくれて安心しました。

ゲストハウスでの1週間は踏み台を作ったり、冷蔵庫を運んだり、ママさんの子どもちゃんたちと遊んだりと毎日が大忙しで充実していました！そしてゲストハウスの面白みはやはりいろんな人がやってくるということだろうと思います。案の定たった7日間の間に、性別も目的も違う面白い方々にたくさん出会いました。皆さんのはなしを聞くたびに世界にはいろんな人がいて色々な価値観の中で共に暮らしていることがわかり、自分には何ができるのかを考えさせられた1週間でした。

色々な悩みごとにも一緒に歩みを合わせて親身に聞いてくれるのも田中さんやももさんが年が近く、また同じ学生という共通点があるからなのかもしれません。

近所のおじいちゃんや地元でかんばっている多くの人からたくさんのパワーをいただきました。そして今回お忙しいところ早く受け入れてくださったももさんと田中さんには本当に感謝しています。良い意味で彼らに負けないように自分もこれから頑張ります。ありがとうございました。

そしてまたきます。

○ 松尾千奈都

気仙沼に来出して3年目で今回は、インターン生として携わらせてもらいました、3年通ってみて、復興して来たなーというよりも何もなくなったな、そして山（かさ上げ）が多くなったなーという印象です。震災から6年が経とうとしていて、昔のことになりかけている東日本大震災のことを改めて考える機会になったし、これから自分がすべきことを考えさせられました。

今回初めてリアスアーク美術館に行って震災当時の写真を見て来ました。知っている道に大量の瓦礫があって、その後には何も残っていない土台だけの異様な光景広がって、改めて震災によってそれまでの日常がなくなってしまったこと、被災地であることを思い知らされました。写真とそれに付いている言葉1つ1つ見ているいつの間にか4時間経っていて、その後に参加者さんとも回ったので、計6時間程度いました。気仙沼は何度も色々な津波の被害にあってその度に高台に行って、時間が経つ



につれてまた海の近くにおりて、被害にあってということを繰り返して、、、、。どうにかこの震災のことを後世に伝えて同じ過ちを繰り返さないようにしなければいけないし、それが私たちの今すべきことなんじゃないかなと思いました。

地元の人の話を今回は3人から聞くことができました。気仙沼初めて来た時は、震災のことを知ること・ボランティアに来ることに精一杯でいっぱいになっていることが多かったけど、今回は落ち着いて話を聞くことが出来ました。3人の話を聞いて思ったのは、地元の人の想いは東日本大震災を知るだけでなく、次回の地震・津波が来た時に逃げられる、生き残れる知識を得て生かすことを私たちに伝えたいのではないかなと思いました。「海が引いたのを見たら上に上に逃げなさい」「遠くではなく高いところに」「1分間揺れたら津波が来ると思いなさい。」「油断してはいけない。油断が命取りになった人も多い」「ここに逃げていれば大丈夫。その言葉を信じていたら流されてしまった人がいる」この言葉は各語り部さんが話してくれた言葉です。もしよかったらこの中の1つのワードだけでもこれを読んでくれた人が覚えていてくれたら、いいなと思います。

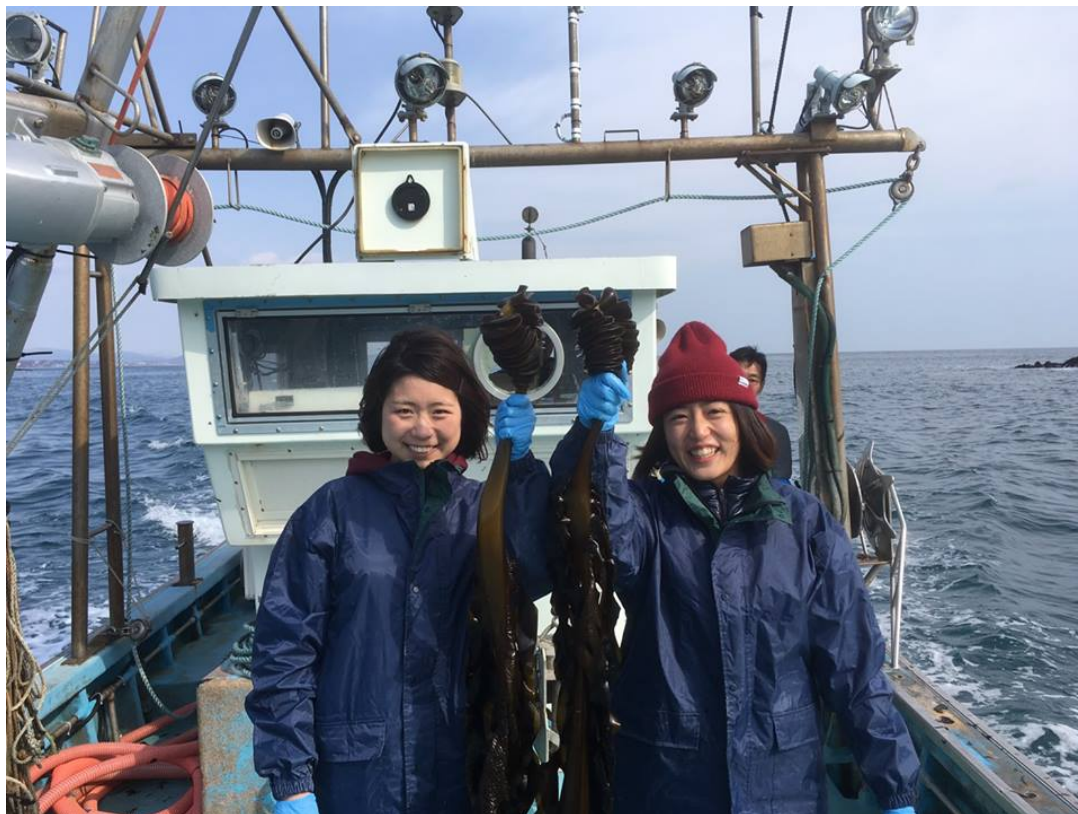
絵本カフェについて

今架け橋では絵本カフェをしています。たくさん本と素敵なママとちびっこ店員に囲まれてのんびりした日を過ごしました。ママの声は、「保育園に預けるのは怖いから目の届く範囲で子どもがいるのは安心」「保育園に預けると震えて泣いてかわいそう」などママたちの預けることへの不安と絵本カフェがあることでどれだけ安心して働くことができているかということを知ることができました。地元のお母さんや子供達の集まる場になっていてこれからいいコミュニティーができていくのではないかなと思いました。

今回、大学最後の休みに一番長く休みが取れるタイミングで東北に来ました。自然災害はいつどこで誰があうのかもわからない、そんな危機感を持たなきゃいけないことをあらためて感じました。また、地元のお母さんたちと話をして、気仙沼の人の温かさに触れて、お昼寝して夜は寝ないで掘りごたつで徹夜して（笑）また近いうちに気仙沼に戻ってこようと思いました。短かったし、今も本当にやりたいこともいっぱいあって帰りたくはないけど、それは次回の課題にしたいと思います。本当にありがとうございました！！

2) 活動写真

(上) ワカメボランティアの調整と体験 (下) インターン生作成のひな祭りの飾り



(8) 終わりに

私が気仙沼に初めて来たのは震災 5 年目の夏でした。経験として一度は被災地を見てみたいと思い、ちょうど旅の途中のルートで通る機会があり軽い気持ちで立ち寄りました。たまたま気仙沼に寄り、友人の紹介でたまたま来たゲストハウス架け橋。まさか自分がこんなに深く関わる場所、組織だとはその当時思いもしませんでした。

正直今私がここにいる理由は震災とはあまり関係ありません。ボランティアもろくにしたことがないし、復興に対して強いモチベーションがあるわけでもありません。かっこよく復興のために頑張っていますとは言えず、楽しい、好きだからここにいるということが間違っているような気がして、最初のうちはあまり自信を持って生活できませんでした。

でも今はそれでもいいのだと思っています。私がここにいるのは気仙沼の地と気仙沼に住む人々が好きだからです。人が温かい、ごはんがおいしい、故郷のような居心地の良さがある。それがこの地の強みだと思っています。ボランティアや復興支援はまちが元どおりになればなくなっていく。けれど気仙沼が好きだという人々は復興後もまちから消えない。自分のように気仙沼のことを好きな人が増えて、気仙沼の良さをみんなが知ってくれたらそれは嬉しいなと思っています。

自分一人では大きなことはできません。私の目標は両隣 3 軒の人々(それくらい近くにいる人々)と幸せに生きていくこと。その人たちが望むからまちづくりにも関わりたいと思うし、復興のために行われていることにも協力したいと思います。

ゲストハウス架け橋は本当に多くの人々の支援を受けて完成した場所です。みんなの思いが詰まった架け橋が大好きで、この場で生まれる笑顔がどんどん増えて欲しいと思っています。まだまだ発展途中ですが、今より素晴らしく、みんなに利用してもらい、キラキラ笑顔が溢れる場になるように来年度も頑張っていきたいと思います。(スタッフ 村松ももこ)

(9) 運営組織

特定非営利活動法人 CloudJAPAN

気仙沼ゲストハウス架け橋常駐スタッフ

○ 代表

田中惇敏

○ 現場責任者

村松ももこ、伊藤優佑

○絵本カフェ架け橋スタッフ

半沢裕子、伊藤華、倉嶋唯、尾形幸、齋藤和恵、岡沢佳子、川元悠依、佐藤華菜、野村美香、熊谷春美

○ 架け橋の全国のスタッフ

木村達海、太田春菜、松尾千奈都、吉川絢乃、山本瑛子、森本将史、小出悟



3. ソーシャルアントレプレナーの資金調達支援事業

3.1 FAAVO 宮城 運営

クラウドファンディングサイト FAAVO は、地域に特化したクラウドファンディングと銘打ち、各地域の団体が行っている。NPO 法人 Cloud JAPAN は、その宮城県版（FAAVO 宮城）の運営をし、アントレプレナーの応援を行っている。

昨年度は JCI（仙台青年会議所）との連携企画もあり、第 47 回仙台七夕花火大会をはじめとした 4 プロジェクト計 2,448,000 円の資金獲得を支援した。



荒浜ロックフェスプロジェクトのみ目標金額に達成しなかったため、今年度は更なる支援能力向上を目指す。

3.2 FAAVO 宮城 プロジェクト成功

先進事例の作成とノウハウ獲得を兼ねてゲストハウス“架け橋”でも FAAVO においてクラウドファンディングを行なった結果、2,085,000 円を獲得することができた。

ここに重ねてご支援をいただいた皆様に感謝の意を伝えたい。



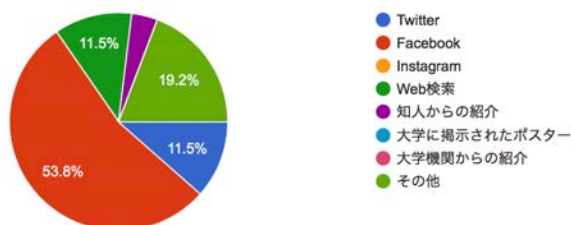
4. 地域で活動するソーシャルアントレプレナーに係る情報発信事業

NPO 法人 Cloud JAPAN 理事・喜多恒介氏の Facebook サイトにおいて有益な情報を掲載した。

Facebook「喜多 恒介」(20,971 フォロー、18,400 いいね！)



2016 年度春期ボランティア派遣活動 in 東北・熊本の情報発信も行い、参加者 77 名における 50%以上のリーチを誇った。



Cloud JAPAN

TEL 0226-29-6514
Address 〒988-0224 宮城県仙沼市長瀬前林55番地3

Page.41

5. ソーシャルアントレプレナーの育成及び事業促進の教育支援事業

教育支援活動として全国での講演活動と気仙沼での家庭教師を行なった。

5.1 講演活動

Cloud JAPAN 理事メンバーによる講演活動を行なったが、今年度については代表理事の田中の講演活動のみ整理する。

タイトル	日時	場所	対象	人数
HLAB 東北	2016 年 8 月 17 日	女川	海外・日本の高校生	約 40 人
JISP	2016 年 12 月 28 日	気仙沼	イスラエル・日本の被災高校生	18 人
YOLO!NIGHT!	2017 年 1 月 13 日	仙台	仙台近郊在住の一般市民	約 60 人
滋賀大学	2017 年 1 月 14 日	滋賀	滋賀近郊在住の大学生	約 30 人
MINATOmeeting	2017 年 3 月 19 日	気仙沼	気仙沼市民	約 50 人

5.2 家庭教師

気仙沼の高校生向けに 2016 年 4 月から 2017 年 3 月まで週 4 回の家庭教師を行なった。

人数と構成（昨年度）：中学 3 年生 1 名、高校 2 年生 1 名、高校 3 年生 1 名

中学 3 年生については進学校の気仙沼高校に、高校 3 年生については石巻専修大学に決まった。

6. 運営組織

特定非営利活動法人 CloudJAPAN

○ 代表理事

田中惇敏

○ 副代表理事

勝水 与茶

○ 理事

喜多恒介

村松ももこ

高瀬璃沙

○ 監事

谷川 徹

○ ゲストハウス架け橋スタッフ

小出悟、伊藤優佑

○ 絵本カフェ架け橋スタッフ

半沢裕子、伊藤華、倉嶋唯、尾形幸、齋藤和恵、岡沢佳子、川元悠依、佐藤華菜、野村美香、熊谷春美

○ 熊本ボランティアハウス山麓園スタッフ

稲田 裕一郎

○ 全国のボランティアスタッフ

木村達海、太田春菜、松尾千奈都、吉川絢乃、山本瑛子、森本将史



7. 取材対応

7.1 書籍出版

代表理事・田中惇敏が共著として学芸出版社より「まちのゲストハウス考」を出版した。

7.2 新聞、メディア

2016 年

10 月 17 日 NHK おはよう宮城

11 月 30 日 三陸新報、12 月 2 日 河北新報

2017 年

1 月 20 日 東北放送 N スタ

2 月 9 日 ラジオ関西 558KH z ! 「スマイルエールプロジェクト」

3 月 8 日 NHK ラジオ アフター3.11 すっぴん！

3 月 10 日 三陸新報「一緒に頑張る地域の助っ人たち」

8. 終わりに

「誰か他の人のために何かをする喜びは、自分のために何かをする喜びよりもずっと大きい」と私たち Cloud JAPAN は信じています。

自分のために高級な車を買うことで得られる充実感よりも、お腹が減って倒れそうな人に、自分の自慢の料理を振る舞い感謝されることにより大きな喜びを感じる人も少なくないのではないのでしょうか。地域のために頑張る人、日本のために頑張る人、そして世界のために頑張る人。一度きりの人生において、社会課題を解決しながら、そして自らもその過程を思う存分に楽しむ。私たちのミッションはそんなソーシャルアントレプレナーが、より有意義に活動できるように彼らと共に歩むことであり、私たち自身もそのプレイヤーの一人として社会課題を解決することです。この想いが形になってから 1 年が経ちました。これまでにたくさんの方々に助けていただきながらこの日を迎えることができました。本当にありがとうございます。そしてこれからも温かく見守っていただければ幸いです。

(副代表理事 勝水 与茶)

